会報
安曇人
安曇誕生の系譜を探る会

第23号　2023年 秋

1　クスッと笑いあえる学びも・・・・　百瀬新治
2～3　地中に埋まる遺跡が語る・・・・・　山下泰永
4～6　源氏物語誕生の時代背景・・・・・　池田義光
7～12　小岩嶽城と古厩氏の謎・・・・・・　川﨑克之

発行責任者　会長　百瀬新治　事務局長　川﨑克之
編集委員長　加藏友美　企画運営委員長　古川幸男
〒399-7102 安曇野市明科中川手1177－3　☎090-5779－5058

クスッと笑いあえる学びも

会長　百瀬　新治

発掘調査をしていると、掘り進めにくい遺構に出くわすことがある。土の色などで見分けやすい竪穴住居址や墓跡の発掘では、きちっと境界を見極めながら調査を進めることができる。ところが、水田や畑だとそうはいかない。毎年の耕作により土が混じるので、遺構の境目がわかりにくく調査者を悩まし続けている。さらに、道具など遺物の出土が少なく、年代特定や大きさ範囲等調査を進める手がかりが乏しいのが田畑の調査である。

もう一つ、日本の農業においては、いったん決まった畦畔による田畑の境界は、近年の圃場整備事業等特別な事情の無い限り、何百年も同じ位置で変り無く続いている。このことも、変化で歴史の積み重ねを決めていく発掘調査では生産域（田畑）の発掘に困難さが加わる。ところが、ある発掘調査で、畦畔を掘り深めるにつれて位置がだんだん変化する事例に出合った。おそらくは、耕作者が年々少しずつ畦畔を掘り崩して自分の土地を拡げる『境押し』という行為を続けた結果だと推測した。昔から、強欲な農家が行ったと伝わる境押しによる境界変化が、後年の発掘調査により遺構として捉えられたのだ。

私は、後日にまとめた発掘調査報告書においてこの畦畔遺構の状況を報告し、境押しという行為の結果ではないかという所見を記述した。所見に敢えて私的な想定を加えたのは、畦畔位置の移動に人間らしい思惑と行いを感じたからである。押された側の土地所有者は、畦畔の変化に気が付かなかったのか？気付かないほど長い年月をかけて土地の拡張に汗を流したのか？等々当時の様子を思い浮かべてクスッと笑いながら原稿書きをした記憶がある。

このように、歴史的な事象を追究し資料などを扱っていると、つい笑顔を浮かべてしまう、きわめて人間臭い出来事に出合うことがある。歴史を学ぶ際などの基本的な姿勢として、考察の論拠や資料的裏付け等きちんと処することはもちろんであるが、その中での人間性に触れて楽しみ、あれこれ想像するような、そんな心に余裕があってもいいと思っている。当会の学び合いもそのようでありたい。

地中に埋まる遺跡が語る　扇状地の土砂運搬・堆積の歴史　山下泰永

今、私たちが見ている安曇野の景観は、いつ創られたのでしょう。よく、里から見える山の形は昔から現在まで変わらないと言いますが本当にそうでしょうか？
安曇平は複合扇状地と言いますが、どのように造られたのでしょう？

発掘調査を行っていると、そのあたりが少しだけわかってきます。例えば、今から約1300年前の奈良時代の遺跡が埋まっているのは、現在の私たちの生活する地面から、どのくらい下に埋まっているでしょうか。推察のとおり、その深さは場所により大きく異なります。烏川扇状地の扇端に分布する穂高地域の遺跡をみてみます。柏矢町の交差点付近の奈良時代の遺構は、約1.3m下にあり、平均すると1年間に1mm堆積する計算になります。それに対し、柏矢町から北に700mほど行った三枚橋遺跡では約70cm下にあります。さらにそこから1.3km北に行った等々力町巾上遺跡では2.3m下から同時代の住居址が発見されています。

弥生時代の遺跡を見ても、三枚橋遺跡では約1m下から弥生時代後期の住居址が発見され、そこから北西に500mほど行った南原遺跡からは、約50cm下から、三枚橋遺跡より、さらに古い弥生時代中期の遺構が発見されています。このことから、今は比較的平坦な地形も、昔は起伏のある地形であったことがわかります。

この起伏多い地形を、今のように平坦な地形に変えたのは、近年の道路整備やほ場整備など、現代の造成ももちろんありますが、扇状地の宿命とも言える河川氾濫による土砂運搬が大きな役割を果たしているといえます。令和元年の台風19号の時のような被害を思い出してみてください。犀川の土手が決壊して、一瞬にして大量の土砂が堆積してしまいました。土木工事の技術が進んでいる現代でもこのようなことが起きてしまうのですから、ましてや土木技術の低かった時代は、頻繁に起こっていたことが想像できます。実際に発掘調査をしていると、厚い土砂の堆積層や、土砂に押し流された住居の跡をよく目にします。

河川の氾濫によって埋没してしまった上原古墳

上原古墳（G-１号墳）は、烏川扇状地の扇央に位置する古墳です。広域農道「田中西」の交差点から西南西へ200mほど行った水田の中にあります。

上原古墳は、昭和5年（1930年）、2枚の水田を1枚にするための造成工事がきっかけとなり発見されました。地元の人によると、以前から田んぼの水が、吸い込まれるように引いてしまう不思議に感じていた場所があって、その場所を入念に調べてみると、周辺にある石よりかなり大きな石が折り重なるようになっていたそうです。そこで古墳ではないかと、当時、豊科高校で教鞭をとりながら地域の歴史研究していた猿田文紀氏に相談し、発掘調査を実施したというわけです。

その結果、南北長さ8.1m（翌年10.1mに修正）、奥壁に高さ0.88m、幅1.2mの鏡石を据えた古墳の石室が発見されました。また、副葬品も出土し、数多くの須恵器の破片と、装身具としては、金環2点のほか、玉類では勾玉7点・管玉1点・切子玉2点・小玉2点が、その他鉄地金銅張の馬具（轡）とその破片と思われる鉄製品、直刀1点、刀子2点が出土しました。（それら副葬品は、現在、穂高神社の御船会館、穂高郷土資料館、文化財資料センターに収蔵されています。）

保存整備後の上原古墳（平成15年）

昭和5年の発掘調査終了時は、上原古墳は横穴式石室の古墳と報告されていましたが、昭和7年に再調査をした今井眞樹氏は、『長野県史跡名勝天然記念物調査報告書』の中で、西穂高塚原にある中上古墳等のように、上原古墳も竪穴式の石室ではないかと書いています。そしてしばらくの間、竪穴式の石室を持つ古墳が穂高地域の古墳の特徴とされていました。

しかし、現在では、竪穴式石室は、古墳時代前期～中期の大型の首長墓（前方後円墳等）で、横穴式石室は、一般的には6世紀に入ってからの小規模な家族墓（円墳等）という認識になっています。そして穂高の西山山麓にある古墳は、すべて横穴式石室を持つ円墳です。完全に壊されてしまわない限り、墳丘と石室の入口がわかります。それに対し、中上古墳や上原古墳のように、水田の中にある一部の古墳は、墳丘も削られ、石室への入口も地上部からはわからないわけですから、竪穴式の古墳と考えらても仕方のないことかもしれません。

上原古墳は、その後70年余り、水田の中に、ポツンと浮島のような状態になっていました。しかし平成に入り、「担い手育成基盤整備事業 穂高西部地区」実施の話が持ち上がり、上原古墳を含むその周辺も、そのエリアとなったため、平成11年に、周辺に同じような古墳がない

かを探るトレンチ調査が実施されました。また、平成14年には上原古墳の石室・墳丘の測量調査を、翌15年には、ほ場整備の余剰地を集めて上原古墳の保存整備が行われました。

上原古墳の前庭部を埋没させた土砂の後（礫層）

平成14年の調査では、石室の規模は、長さ9.2m、幅は奥壁付近で1.26m、中央で1.42m、玄室と羨道境で1.5m、壁高は1.4～1.7mであることがわかりました。また墳丘は、上部は削られてしまっているものの、古墳築造時の地表面まで掘り下げることができ、北西が高く南東が低い傾斜地を利用して古墳が築かれていること、その規模は、東西約13.8m、南北約14.5mであることがわかりました。

現在、石室は、崩落の危険があるため砂入りの土嚢袋を詰め保護しているため、石積みは見ることはできません。そのため墳丘上部に、石室の範囲に合わせレンガを埋めています。墳丘の裾周りは、築造当時の地表面まで掘り下げているため、一見、古墳の周溝のように見えますが、前述のとおり旧地表面です。現地表面からどのくらい低いかというと、墳丘の北側裾部分で約1m、南側の石室入口前庭部で1.5m余り低くなっています。

ではこのような旧地形を、大量の土砂で埋没させてしまったのは、どこの川の氾濫だったのでしょう。最も近くを流れていたのが、上原古墳の南側にある今井沢という川です。今井沢は、柏原沢（烏川を源流とする自然流）の上流で分流し、東に流れる川です。烏川扇状地の扇端にある、古墳時代後期の集落遺跡である藤塚遺跡、奈良時代を中心とする集落遺跡である三枚橋遺跡へ水を運ぶために開削された縦堰です。古代の矢原郷の開発を考察する上でたいへん重要な水路と考えます。そうすると、上原古墳が、他の西山山麓にある古墳とは異なり、扇状地の扇央という特異な場所に位置する理由は、今井沢の鎮めという意味があったのかもしれません。

耳塚 大塚様（H-1号墳）を考える

西山山麓ではなく、上原古墳と同じように特異な場所に位置する古墳に大塚様があります。大塚様は、魏石鬼八面大王の耳を埋めた場所とされ、耳の病にご利益があるということで、一時期は、全国各地から大勢の人が祈願に見えられたこともある場所です。墳丘の上に建つ社には、錐を模した奉納品が飾ってあります。これは耳の穴をきり通してよく聞こえるようにという願いから奉納されたものだそうです。

さて、本題に戻ります。大塚様は以前から注目されていた古墳で、研究者の中には、もし古墳だとすれば、粘土槨の石室を持つ、穂高で最も古い古墳になる可能性があるとも言われていました。そのように言われる理由のひとつが、天満沢川の左岸で、扇状地の扇端の段丘上の最も低い場所に位置する単独墳であるという立地です。また、この古墳から南西約100mの地点から、古墳時代中期の完形の土師器の甕と坩が合口の状態で出土していて、集落も近くにあるのではないかと考えられたからです。大塚様の形状は、円墳というより一辺16mの隅丸方形に近い形を呈し、墳丘の高さは2mという大きさです。しかし、一方で、古墳でない可能性も捨てきれないところです。その理由は、立地的に上原古墳と同様に、天満沢の何回かの洪水で埋没しているはずだからです。もし埋没していて地上部にこのような大きさの墳丘が顔を出しているとすれば、かなり大きな古墳ということになります。その可能性を考えると、古墳ではなく中・近世の行人塚などのような土饅頭かもしれません。心情的には、古墳であってほしいのですが。

耳塚大塚様（H1号墳）

里から見える山の形は、昔も今も変わらない？

長野自動車道関連で北村遺跡が調査され、縄文時代のお墓が、現地表面から約6m下から発見されました。山麓でこれほどの堆積が起こるのは、土石流または土砂崩れかもしれません。また、前述の柏矢町交差点付近のように、平均1年間に1mm土が堆積していくと考えた場合、今から３千年～4千年前の縄文時代の遺跡は、現地表面から３～４m下から発見されることになります。こうして考えてみると、上流から運ばれてくる土砂の量は莫大なものになります。山を削り、上流部付近の地表を削り、下流まで土砂を押し流すわけですから、里山の形は、今とかなり違っていたと思われます。また、もしかすると縄文時代のアルプス、常念岳の雄姿も、今と少し違っていたのではないでしょうか。タイムマシンがあればぜひ見てみたいものです、

歴史エッセイ　源氏物語誕生の時代背景　　池田義光

来年のNHK大河ドラマでは『源氏物語』の作者紫式部を主人公とした『光る君へ』が放送されるそうです。

そこで歴史好きの私としては、なぜ紫式部があの名作『源氏物語』を生み出せたのか、人の行動はその人の生きている「時代」に強く左右されるものですので、その時代背景について考えてみたいと思います。

1　源氏物語と紫式部について

本題に入る前に、まず『源氏物語』と作者「紫式部」のことを少し押さえておきたいと思います。

(1)『源氏物語』とは

平安時代の中頃、紫式部によって書かれた54帖(今でいう原稿用紙2400枚分)にもわたる長編小説の超大作です。そのため紫式部の執筆は何年にもわたったのです。物語のストーリーは、時の帝(天皇）を父とし、帝から寵愛を受けた「桐壺の更衣」を母とする皇子「光源氏」を第１部と第２部の主人公として展開します。第１部は、光源氏が「葵上」「夕顔」「紫上」など数多くの女性と関わりをもち、また父帝の中宮の「藤壺」との恋に苦悩しながらも、太政大臣から太上天皇に準ぜられ栄華をきわめる物語です。第２部は光源氏の苦悩の世界で、最愛の「紫上」を失い、栄華は内側から崩壊していきます。第３部(残りの10帖)は、光源氏の子の「薫大将」と「浮舟」との恋愛を描きながら、不安に満ちた暗い世界が展開されます。紫式部は全54帖で、主人公の光源氏と子の薫大将を通して、恋愛、栄光と没落、政治的欲望と権力闘争など、平安時代の貴族社会を描いています。文章は華麗で人物・自然の描写にすぐれ、各巻が独立した場面を形成しながら全体で緊密な長編小説としてのまとまりをみせています。『源氏物語』は古典文学の最高峰と評価されています。

(2)『源氏物語』の影響と評価

①執筆当時の評価

当時は印刷技術がないので、原本が書かれた後、評判が良いものは、写本によって増刷されて読まれました。『源氏物語』は執筆の初めから評判が良かったようでたくさん転写されました。摂政藤原道長がこの物語を読んで、作者紫式部を娘の中宮彰子付き女官に起用しました。同時代の菅原孝標の娘は、姉や継母が語ってくれる『源氏物語』の話に夢中になり、早く上京してこの物語を読みたいという熱い思いを抱きつづけたと『更級日記』に記しています。『源氏物語』読者は宮中だけでなく地方貴族の家庭にも広がっていたのです。

②後世の評価

『源氏物語』は約100年後の院政期に『源氏物語絵巻』が作成されたほど高い評判を持ち続け、転写に次ぐ転写がなされました。平安末期には『源氏物語』の元々の文章がかなり分からなくなったぐらい頻繁に転写されたのです。

『源氏物語』のまねをしたり、影響を受けた物語は、平安時代の『栄華物語』、江戸時代の井原西鶴の『好色一代男』と柳亭種彦の『偐紫田舎源氏』など、いつの時代にも多数ありました。

『源氏物語』は和歌の面でも評価されました。後白河上皇に命じられて『千載和歌集』の選者となった、院政期歌壇の長老、藤原俊成は「源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり」という発言をし、『源氏物語』は鎌倉時代以後の歌壇・連歌壇にも大きな影響を与えたのです。さらに、能楽や浄瑠璃や歌舞伎にも影響を与えました。

『源氏物語』の研究や注釈も数多く、国学者本居宣長が『源氏物語』に見られる「もののあわれ」こそ日本人固有の情緒であるとしたことは有名です。

③近代・現代の評価

近代に入っても、与謝野晶子・窪田空穂・谷崎潤一郎・円地文子・瀬戸内寂聴などによって現代語訳が行われ、舟橋聖一によって演劇化されています。他にも、『源氏物語』に影響を受けた漫画・映画・テレビドラマなどは数限りなくあります。

④世界の評価

『源氏物語』は、英語・イタリア語・チェコ語・フランス語・ドイツ語・スペイン語・韓国語・中国語・ロシア語など、20カ国以上の言語に翻訳されて各国で親しまれ、「世界最古の本格的小説」「古典における世界文学の最高傑作」などの評価を受けています。

(3)「紫式部」とは

紫式部が活躍したのは10世紀の終わりから11世紀の初めごろ(平安時代中期）です。978年ころ？紫式部は貴族の藤原為時の娘として生まれました。為時は下級貴族ながら、花山天皇に漢学を教えた漢学者で歌人です。彼女もその影響を受けて文学的な才能に恵まれました。小さい頃、父が兄に中国の歴史書『史記』を教えているとそばで聞いていた彼女は兄より先に『史記』を覚えてしまい、父は「この子が男子でないことが残念だ」と嘆いたという逸話が残っています。

彼女は20代後半でかなり年長の貴族、藤原宣孝と結婚し一女をもうけましたが、結婚後3年ほどで夫と死別。その現実を忘れるために『源氏物語』を書き始めたそうです。当時は紙が貴重だったため、紙の提供者がいればその都度書き、仲間内で批評し合うなどして楽しんでいたようです。そのうちにこの物語が貴族の内で評判となり、藤原道長に娘の中宮彰子の女官として起用されました。宮中に上がった紫式部は藤原道長の支援の下で物語を書き続けました。そして約６年間の宮仕えの間に、54

帖からなる『源氏物語』を完成させたのです。宮中で仕事をするようになり、紫式部の創作意欲はますます高まったでしょう。自分が実際に見たり聞いたりしたことを、そのまま物語創作に生かせるのですから。

『源氏物語』の中にはたくさんの和歌が詠まれていますが、紫式部は歌人としても優れ、子供時代から晩年に至るまで自らが詠んだ和歌から選び収めた歌集『紫式部集』があり、さらに『小倉百人一首』にも彼女の和歌が収められています。

２　紫式部はなぜ源氏物語が生み出せたのか、その時代背景に迫る

いよいよ本題です。紫式部が『源氏物語』を生み出した時代背景を考えるための大きなヒントになるのが、平安時代には、赤染衛門作と言われる『栄華物語』、藤原道綱の母の『蜻蛉日記』、清少納言の『枕草子』、和泉式部の『和泉式部日記』、紫式部の『紫式部日記』、菅原孝標の娘の『更級日記』など貴族の女性、中でも宮中女官の手による優れた文学作品が綺羅星のごとく生み出されたということです。「それがなぜなのか」をまず考えて見ましょう。

(1)貴族女性は婚姻のために高い教養と才能が求められ、高い教養を持つ女官が必要とされた

①当時は「通い婚・妻問婚・招婿婚」だった

当時の貴族の婚姻は男性が女性の家を訪問する「通い婚・妻問婚・招婿婚」だったために、出世や勢力拡大を図るためには官位の高い男性を娘のもとに通わせることが極めて大切だったのです。しかも生まれた子は、母方で育てる習わしでしたので、孫が男の子で将来高い官位についた場合には、外祖父の得る利益も大きいものでした。よく知られているように、それが藤原氏などの勢力拡大の基盤となったのでした。だから貴族は娘がいかに高貴な男性に見初められるかに心血を注ぎました。

②平安女性の美(魅力）の条件

当時の高貴な女性は、男性の前では扇で顔を隠したり御簾ごしに会話したりして、男性に顔を見せないことが貴族女性の生き方に大きな影響を与えました。

顔を見せないので、髪の美しさが美人の一つの条件とされたのです。髪が黒々として長ければ長いほど美人なのです。『枕草子』の中でも「うらやましげなるもの」として長くてきれいな黒髪のことが書かれています。当時の絵巻にも長髪の貴族女性の姿が描かれています。歴史物語『大鏡』には、中宮彰子の髪は「着物の裾よりも長い」と書かれています。第62代村上天皇の女御の藤原芳子について「出かけようとした芳子様が牛車に乗り込んだところ、髪の毛の先端はまだ部屋の中にありました」というウソのような記述があります。何年もかけて髪を長くして生活するためにはお世話をする侍女が必須ですからそれができる女性でないと長髪生活は無理でした。

貴族の女性の衣装である女房装束（十二単）も女性の評判を決める一つでした。袖や裾や合わせ部分に下の衣が少しずつ見えるのは一種のオシャレでした。これには季節や行事に合わせた色の組み合わせが求められ、基本を押えることがマナーとされました。その上で工夫をすることがファッションセンスとされ、それにより女性の評判が立ちました。女房装束は20kgほどの重さがあるのですが、『栄華物語』にはある女房が重ねに凝り過ぎて20枚以上重ね着した結果、重くて歩けなくなったとあります。

紫式部（土佐光起画、石山寺蔵）

女房装束の知識とセンスも大事な教養ですが、様々な教養が必要でした。中でも平安貴族男女の交際手段は和歌のやりとりが主だったために、和歌の教養は必須でした。男性が顔も見たことがない女性の品定めの手段として和歌を送る。すると女性はそれに答えた和歌を返すのです。和歌は昔の和歌や漢詩を踏まえたなぞかけのようなものが多かったので、それを読み取った上でしかも気の利いた優美なセンスある歌を返してくる女性に男性は惹かれてしまったのです。和歌を上手に詠むためには、膨大な和歌・漢詩を覚え、豊かな知識を持ったうえに和歌の技巧とセンスが必要です。しかも文字もきれいでなければなりません。紫式部も和歌が得意だったし、世界三大美人で有名な小野小町も『古今和歌集』に選ばれたほどの歌人です。

その上漢詩の教養が深ければ言うことがありません。『枕草子』に『香炉峰の雪』という話があります。『雪がたいそう降り積もっている寒い日に、格子を下げて（窓を閉めて）、火鉢に火をおこして、中宮定子様にお仕えしている皆で話をしていると、中宮定子様が、清少納言よ、香炉峰の雪はどうであろうか、とおっしゃった。私は人に格子を上げさせて（窓を開けさせて）、私が御簾を高く上げたところ、中宮定子様はお笑いになりました』という箇所です。唐の詩人白居易の詠んだ漢詩に出てくる『香炉峰に積もった雪を、御簾を上げて眺める』という一節のことを知らなければ、この清少納言の行動と、中宮定子がなぜ笑ったかは理解できません。中宮定子ともなるとこうした漢詩まで暗記していたということですし、清少納言はただ知っているだけでなく、とっさの機転がきいたということです。これが教養の高い魅力ある平安女性なのです。

③娘の教養をつけるために女房が求められた

従って貴族は、娘婿に高貴な男性を射とめる手段として、娘の教養と才能の育成に力を入れたのです。

娘に高い教養をつけるには高い教養を持った女性を「女房」とすることです。「女房」とは、皇后や中宮な

ど高貴な宮中女性のお世話をする侍女ですが、中には家庭教師的な役割をする女官もいたのです。

摂政藤原道長は娘で一条天皇の中宮彰子の女房に紫式部を、関白藤原道隆は娘で一条天皇の皇后定子の女房に清少納言を採用したのです。

(2)平仮名は女性の文字だった

「平仮名」の誕生は平安時代の初めと言われています。漢字はずっと前に日本にもたらされましたが、複雑で難しいものが多く数も膨大なため使用するのは大変でした。それを克服するために生まれたのが「平仮名」です。「平」＝易しいという意味で、漢字に比べ極めて簡単に書ける文字でしかも文字数が圧倒的に少ないので使い易い。もっと重要なことは「平仮名」は「表音文字」であるために日本語を書き記すことができるようになったのです。

実は、漢字を使って日本語を表わす工夫は、奈良時代に「万葉仮名」として行われていました。「万葉仮名」は漢字の中国風発音(音読み）を使って、漢字の意味と関係なく「音」を借りて日本語の音に当てはめて日本語を表現する方法です。万葉仮名を用いると和歌を日本語で表現できたので、『万葉集』で盛んに使われたから「万葉仮名」と言います。ただ和歌のうち、どの漢字が音だけの文字かどの漢字が漢字本来の意味を持つ文字か、の判別が難しいのです。そのために漢字とは違った文字で、しかも漢字より簡単に書ける文字作成の必要性が出てきて「平仮名」が生まれたのです。

ところがそれほど便利な「平仮名」を平安時代の男性はほとんど使っていません。当時は、「仮名」は「仮の文字」であって本当の文字ではない、漢字こそが「真名＝真の文字」との扱いを受けていました。だから男性は「漢字＝真名」で書くべきで、女性なら「仮名＝仮の文字」を使っても仕方がないと考えられていたのです。わざわざ『男もすなる日記といふものを、女もしてみんとてするなり』と、紀貫之が女性のふりをして『土佐日記』を書いたのは、男性なら漢字で中国語で書くべきところを、女性なら平仮名まじりの日本語で書けたからで、その方がずっと書きやすかったからなのでしょう。ただし、例外として「和歌」は日本語なので、男女ともに平仮名を使っても良いのでした。

そのため、情景描写や当時の人々が自分の思ったことや感じたことなどを散文で自由に豊かに表現することは、「平仮名」を使用する女性（貴族女性）の得意となったのです。それも貴族女性・宮中女官に優れた文学作品が生まれた時代的背景です。

ちなみに、この時代には「片仮名」も発明されていたのですが、漢文を日本語風に読み下す、つまり翻訳のようなことをするために使用されただけで、主にお坊さんが漢文のお経に、レ点や上下、一二などの文字を挿入して語順を示すと共に、日本語特有の活用語尾や助詞などに片仮名を使用したものです。「片仮名」は一般にはあまり使われなかったのです。

(3) 華やかな宮中生活と男女交流の場があった

『源氏物語』には、貴族たちの宮中での華やかな生活と様々な男女の交流が題材として連綿と描かれています。それが当時の人々の興味を惹きつけました。なぜそんな華やかな世界ときめ細かい男女交流や政治的な駆け引きの文章が書けたのでしょうか？一つには、当時の平安貴族は経済的にも恵まれ、文化も成熟して、華やかな宮中生活が営まれていたことです。また、前述したように当時の貴族は「通い婚・妻問婚・招婿婚」で、どんな男性が娘の元に通ってくるかが大切なことでしたし、また若い男性貴族側からもどんな女性と婚姻してどんな後ろ盾を得るかが重要なことでしたので、若い男女の交流は極めて盛んだったのです。そんな時代に、宮中で暮らしていた紫式部や『源氏物語』の読者である貴族たちにとって、華やかな宮中生活と男女の交流は大きな関心事であり、紫式部の物語の題材と描写に強く影響を与えたものと思われます。

(4)物語文学への強い好意と支援があった

『源氏物語』執筆時代には、「物語」に対するニーズと支援がかなりあったようです。

人々にとって平仮名主体の物語文学は、普段使っている言葉(日本語）で、しかも使われる漢字数は少なかったので、すごく読みやすいものだったと思われます。しかも題材は最も関心の深い宮中の男女交流や出世と駆け引きの物語で、ストーリーと場面設定は「架空」というのが実におもしろい。紫式部は『源氏物語』は現実の世界ではないけれど、あり得るべき真実を狙っているもので、決して「この世の他のこと」すなわち荒唐無稽なことではないと主張しています。

紫式部がこの物語を書き始めると、早くも評判になり、宮中貴族の間でかなり読まれました。この物語の作者だったおかげで当時の最大実力者摂政道長の娘中宮彰子の女房に採用されたのですし、雲の上の一条天皇までが『源氏物語』の続きを早く読みたくて中宮彰子の元を頻繁に訪れたのも作者としてはこの上なく嬉しいことです。『更級日記』に書いてあるように、地方貴族にまで『源氏物語』の評判が聞こえ、競って写本したのです。熱狂的な源氏物語ファンが数多かったことも「時代背景」の一つだと考えます。それに、藤原道長からは、執筆のための紙や筆をたくさん与えられたはずです。当時、紙はとても貴重品だったので、紙の提供者がいなければ、今でいう原稿用紙2400枚分の超大作を完成させるのは不可能だったのです。

以上述べてまいりましたが、あくまでもそうした「時代背景」を基盤として、もちろん、「紫式部の個人的な理由」、つまり彼女の才能や境遇や運などがあったからこそ、≪紫式部があの時代に『源氏物語』を書けた≫ということは言わずもがなのことです。

小岩嶽城と古厩氏の謎　　川﨑克之

はじめに

武田氏による安曇野侵攻の際、最大の激戦地となった小岩嶽城。天文21年（1552）城主以下五百余人が頸を取られ、多数の足弱が生け捕りにされた(1)。戦死した城主は仁科盛國の氏系の三男・古厩盛兼とされている。その後、嫡男の盛勝親子は武田氏に先手衆として仕え、盛勝の子・平三盛隆は川中島合戦に出陣しており、信玄を裏切らない旨の起請文を提出して臣従している。その武田氏が滅亡した後、松本に復帰した小笠原貞慶に従ったが、盛勝は謀反を疑われて松本城で誘殺される。そして小岩嶽城は焼き払われ、逃亡した嫡男の平三は討ち取られてしまう。ところが次男の盛親は父と兄を謀殺した貞慶の嫡男秀政に仕え、子孫は小笠原の家臣として六代まで続いている。

以上がほぼ通説となっている古厩氏の系譜である。古厩氏は一族滅亡の危機に二度も見舞われながらも存続したことになる。歴史ドラマにでもなりそうな戦国乱世の物語だが、果たして史実なのか。また、その陰に隠された物語は無かったのだろうか。

その謎を解く鍵となる人物は、青原寺の位牌の銘に青原寺を開基したとある小岩圖書盛親と思われる。穂高町誌では小岩圖書盛親は古厩盛親としているが、果たして同一人物か、それとも別人か。

1　小岩嶽城は何故攻められたのか？

信濃一円の支配を目論む武田氏にとって、小岩嶽城を攻略する戦略的意義は何だったのか。

天文19年(1550)7月、武田方の攻撃によってイヌイの城（註1）が落とされると、林、深志、岡田、桐原、山家など小笠原方の城は戦わずして落ち、小笠原長時は平瀬城に逃れ、ついで坂城の村上義清を頼った。同年10月、村上氏の援軍を得た長時は平瀬城に入り府中奪回に動くが、明科の塔原まで来ていた村上勢が直前に撤退したため、やむを得ず自軍のみで戦って一時の勝利を得るも、頽勢は如何ともしがたく中塔城に引き籠もった。

翌20年、武田方は深志城を拠点として府中以北の攻略を始め、まず平瀬城を落として安曇野侵攻の橋頭堡とした。しかし東山に連なる田沢・光・塔原・刈谷原の諸城を直ちに攻略することはせずに、既に落とした平瀬城～犬甘城～岡田城（伊深）～稲倉城のラインをもって東山・会田方面の各城への押さえとし、次に攻略対象としたのは小岩嶽城だった。

小笠原長時は既に本拠地の林城から逃れて中塔城に立て籠もっており、同盟関係にあった仁科一族は、道外（註2）など一部が既に武田氏に仕えており分裂状態だった。小岩嶽城攻撃は、反武田の仁科勢と小笠原勢との間に楔を打ち込んで分断することが最大の狙いだった。だからこそ晴信自らが出馬して来たのだ。

天文21年（1552）8月、武田方は小岩嶽城攻めに取りかかった。小岩嶽には小笠原氏方の残存勢力と反武田の仁科勢や近隣住民が多数入っていたと考えられる。そのために指揮系統も曖昧なため降伏もままならず、500余人が討ち取られ、城主の戦死の様子も定かでないような激戦の末落城した。

晴信の狙い通り小岩嶽城を落とした効果はすぐにあらわれた。同年12月、中塔城に籠もっていた長時は長尾景虎を頼って越後に逃れ、翌22年1月には仁科総領家の盛康が出仕した。小岩嶽城の落城によって小笠原氏は退転し、仁科総領家は武田氏に仕えることになったのだ。さらに４月に刈谷原城が落ちると東山に連なる塔原城・光城・押野城は戦わずして降伏している。イヌイの城が陥落して５城が自落したのと同じ現象が起きているのだ。晴信の戦略眼の確かさを物語っている。

2　小岩嶽城と古厩氏

小岩嶽城の主は通説的には古厩氏とされている。大町を本拠地とする仁科盛国が小笠原氏との永年の抗争に終止符を打って和睦し、安曇郡の穂高・堀金・渋田見・古厩等に一族を派出した。それらのうち大永年間（1521～~1528）頃に三男の盛兼が古厩に進出して在名を名乗ったのが古厩氏の始まりで、古厩の地名の起源は古代に厩があったからと考えられている。舘の西方約1.5キロに古厩城（現・正真院）を築き、北方に鼠穴城、南に空保木城を配し、戦時の備えとして古厩城の南西約2キロの富士尾山麓に小岩嶽城を築いたとされる。

小岩嶽の城域は富士尾山の東尾根上にある詰城と、麓の本城部分、城下町に当たる宿城部分とに大別することができる。詰城は標高850m、比高200mの急峻な山上に築かれている。大手筋は本城背後から登る東尾根と考えられ、数段の郭が削平されている。南尾根は小岩嶽の名称の由来となったと思われる奇岩巨石を縫うように上る。奇岩巨石群が天然の防御施設になっている。本城は東尾根と南尾根によって馬蹄状に挟まれた内側にあって、前面は長大な横堀と数段の広大な段郭によって防備を固めている。しかし馬蹄形の尾根の防御施設が無力化されてしまえば正に袋の鼠になってしまう。宿城とされるのは千国道を挟んだ東側の城下集落で、これを囲い込むように惣構えの防御ラインが設けられていたとされる。

進出当初に築かれたとされる古厩城と比較して、小岩嶽城は集落を取り込むなど広大かつ堅固な城となっており、短時日に築城されたとは考え難く、古厩氏よりも古い先住の土豪の存在を窺わせる。

3　古厩氏と小倉藩渋田見氏系図の謎

古厩氏の歴史を語る際には一志茂樹の「美術史上より見たる仁科氏文化の研究」所収の「小倉藩渋田見氏系図」が参照されることが多い。しかし出典が明示されておらず資料の孫引きということで、なんとももどかしいと思っていたところ、丸山楽雲氏の講演の際に頂戴した資料集(2)の中に「小倉藩小笠原家諸氏系図巻第三信州之部・渋田見舎人盛方系」という全く同じ系図があることに気がついた。もとより系図によって歴史を考えることには常に危うさが伴う。後代における改変もあり得るからだ。しかし資料が少ない中で、有力な手掛かりになることも事実で、系譜成立時の背景も勘案しながら注意深く取り扱う必要がある。以下の小倉藩渋田見氏系図の古厩盛兼の項を見てみよう。

＜小倉藩渋田見氏系図より古厩盛兼の項を抜粋＞

―古厩平兵衛盛兼

信州安曇郡古厩之領主、後因幡守ト云フ

此子ヲ古厩因幡守盛勝ト云フ、盛勝嫡子ヲ古厩平蔵盛時ト云フ、二男ヲ古厩輿五右衛門盛親ト云、三男ヲ古厩何右衛門盛利ト號ス、盛親・盛利各秀政公ニ奉仕ス、後ニ忠眞公ニ仕フ、盛親子古厩甚兵衛盛次事ハ長次公ニ仕フ、盛次子ヲ古厩輿五右衛門盛常ト云フ、盛常子ヲ古厩甚兵衛盛清ト云フ、盛兼ヨリ六代ニ至ル、盛清事中津ヲ退去シ浪士トナリ断絶ス、盛兼法名道中

系図には古厩盛兼から始まる古厩氏六代の系譜が記されている。しかし初代盛兼が武田方に攻められて小岩嶽城で戦死したこと、二代盛勝が復帰した小笠原貞慶によって松本城で謀殺され、三代平蔵盛時（＝平三盛隆）が細野郷で討ち取られたことは記載されていない。

その一方で、同系図に古厩盛兼の長兄である仁科盛明の孫・盛政が武田氏によって自害させられたこと、次兄の穂高大進とその子・貞盛が武田勢に加わって平倉城攻めで討ち死にしたこと等の記載があるのとは対照的である。はたして小岩嶽で戦ったのは古厩氏で、戦死した城主は盛兼だろうか？

4　小岩嶽城で戦死した城主は？

信府統記(3)によれば小岩嶽で戦死したのは小岩嶽図書盛親とされている。ところが通説では、戦死したのは古厩盛兼ということになっている。はたしてそうだろうか。城主とされる盛兼以下500余人が戦死したにも関わらず嫡男の盛勝が生き延びて武田氏に仕えたということをどう考えたら良いのだろう。降伏して許されて臣従したとされるのが一般的ではある。しかし小笠原氏が復帰後の古厩氏に対する苛烈な仕打ちを見る限り、そう単純なことではなさそうだ。小笠原貞慶の仕置きは古厩氏に積極的な裏切りがあったとの認識によるものと考えられるからだ。

二つの場合が考えられる。

一つは古厩一族が既に小笠原方を見限って武田氏に帰順していたので入城しなかった場合で、当然ながら戦死するはずもない。そもそも系図には古厩盛兼が武田方と戦って戦死したとの記載がない。小笠原方として武田と戦って戦死したのなら名誉の戦死であり、その旨記載されてしかるべきだろう。しかも、これは小笠原氏に臣従している渋田見氏による系図である。古厩氏と親類関係にある渋田見氏にとっては不都合な事績ではない。記載されていないのは古厩盛兼とその一族が小岩嶽城に入っておらず、戦死もしていないからなのだ。それ故小笠原氏から離反した古厩氏は復讐の対象となったのだ。小岩嶽城に入っていたのは小岩嶽図書盛親であることは第５章で論述する。

もう一つは武田氏の侵攻によって古厩一族は抗戦派の当主・盛兼と恭順派の嫡男・盛時の親子で分裂・対立しており、抗戦派の盛兼らが反武田の仁科系の武士とともに援軍として小岩嶽城に入ったと考える場合で、恭順派の盛時らが報復の対象となったのだ。抗戦派の当主・盛兼が入城していた可能性はある。この場合は古厩盛兼と小岩嶽図書盛親とが別人であることを論証しなければならない。これについては第６章で論述する。

結論としては、この二つのいずれの場合でも城主として戦死したのは盛兼ではなく小岩嶽盛親である。

5　永禄4年の城攻めと位牌の謎

信府統記(3)によると小岩嶽落城は永禄4年（1561）

６月とあり、青原寺の小岩図書盛親の位牌にも永禄4年６月とある。しかし、信頼できる史料とされる高白齊記には落城は天文21年8月とあることから、信府統記の小岩嶽図書盛親の記事は誤りだとの指摘がある。これはどのように理解すれば良いのだろうか。永禄4年には既に安曇・筑摩地方は武田氏の支配下にあり、主だった武将は武田軍に組み込まれて (4) 川中島の戦いに動員されていた。従って、この年に安曇野で戦闘があったとは考えられず、小岩嶽城落城はあり得ないことになる。すると永禄4年の戦いとは何だったのか。

永禄4年は第四次川中島合戦の年で、この年、武田氏は謙信の留守中に信濃町の割ヶ嶽城（鰐ヶ嶽城とも）を攻めて、武田方の武将・原美濃が深手を負い、辻六郎兵衛が討ち死にする奮戦をして落城させている (5) 。原美濃は天文20年に攻め落とした平瀬城の城代 (6) になっており、小岩嶽城攻めでも活躍したことは想像に難くない。信府統記（３）によれば小岩嶽城攻防戦でも原美濃は手傷を負っており、辻六郎兵衛はここでも討ち死にしている。二度戦死したことになる。これは明らかに混乱している。信府統記の著者が、天文21年の小岩嶽城の攻防の激しさを描くために永禄4年の割ヶ嶽城の激しい戦闘の模様を引き写したことによって生じた混同と考えられる。（註3）さらに、信府統記の小岩嶽城落城と青原寺の小岩図書盛親の位牌の年代が一致するのは、信府統記の著者が位牌を参照して小岩嶽城落城の年代としたことによると考えられる。

また、青原寺は小岩嶽城の戦いの際に焼失したと思われ（現本堂建設の際に土中から大量の炭が出土したという）、後に再建された時に小岩図書盛親の位牌も再製されたと考えられる。（註4）その折りに、青原寺開基の小岩図書盛親の名は留めたものの、没年は割ヶ岳落城の永禄4年と誤記され、その後信府統記に記載されたのだ。

青原寺を再建して小岩図書盛親の位牌を作って供養した人物は誰だろうか？

６　古厩盛兼と小岩嶽図書は同一人物か？

前章では小岩嶽の戦いで戦死したのは小岩嶽図書盛親であることを考察したが、次に小岩嶽図書盛親と古厩盛兼とは別人であることを古厩氏関係の寺院の開基年代から考えてみよう。

醫王山松尾寺の中興開基はいつ？

小岩嶽城から北方約２キロにある松尾寺の中興の開基は信府統記 (7) では大永8年（1528）仁科盛政とされているが、穂高町誌 (8) によれば盛政は後代の人物なので仁科盛国の三男古厩盛兼の誤りだとしている。また、松尾寺所蔵の代々記に中興開山は一世源智法師大永8年（1528）であり、さらに薬師堂の壁板の甲州人による落書に天文3年（1534）と記されていることから、それ以前に建立されていたことになるとして、中興開基は大永8年としている。これは納得できる。

安養山青原寺の開基はいつ？

小岩嶽城の麓にある青原寺所蔵の位牌の銘には法名真晴院殿前図書小岩盛親大居士と法名青原寺院殿前兵部安叟盛康大居士の開基とされている。位牌から開基年代を推測することはできないが、穂高町誌 (9) によれば、寺が所蔵する住持記に開山の蘭如從賀が天文5年（1536）に没しているとあるので、青原寺はそれ以前の開創としている。信府統記は小岩嶽図書の建立としている (10) 。位牌の「小岩」は「小岩嶽」と考えて良く、前圖書小岩盛親は言うまでもなく小岩嶽圖書盛親である。

青原寺の位牌の小岩（嶽）盛親は誰？

従って、松尾寺は大永8年（1528）の中興開基、青原寺は天文5年（1536）以前の開基と考えられるから、松尾寺が先に建立されたとすれば青原寺との建立時期は最大でも8年の時間差しかない。青原寺が先だとすれば、それは自ずと古厩氏進出前からの豪族・小岩嶽氏の存在を意味することになる。

従って、松尾寺開基の古厩盛兼と青原寺開基の小岩嶽盛親とが同一人物だとすると、短期間に二つの寺院を建立したことになり、古厩氏が来住して舘と古厩城とを築造した時期でもあり財力的に難しいと思われる。青原寺および小岩嶽城は先住の小岩嶽氏が築造していたものと考えるべきである。即ち、小岩嶽図書盛親は古厩盛兼とは全くの別人であり、小岩嶽の戦いで戦死したのは古厩盛兼ではなく信府統記の通り小岩嶽図書盛親ということになる。青原寺の位牌に銘記されている小岩（嶽）図書盛親である。但し、没年は前述したように永禄4年ではなく天文21年である。

また、穂高町誌 (9) は青原寺の位牌の小岩図書盛親と古厩盛親は同一人物としているが、明らかに世代が異なるので別人である。古厩盛親は小笠原秀政に足軽大将として仕えており、永禄４年以降も確実に生存している。戦さで焼失した青原寺を中興開基して小岩図書盛親の位牌を再建したのは古厩盛親である可能性がある。

7　武田氏に忠勤を励んだ古厩氏

古厩氏は武田氏に臣従した仁科惣領家をはじめ穂高氏・堀金氏・渋田見氏など仁科親類・被官とともに武田軍の先手衆として忠勤を励むことを求められた。古厩盛隆は川中島にも出陣している。

永禄10年（1568）仁科氏の親類被官一同は生島足島神社において信玄に叛意を起こさぬことを起請文に認めていて、古厩平三盛隆がこれに花押血判している。平三盛隆は系図にある平蔵盛時と同一人物と考えられる。小笠原貞慶の復帰で盛隆は小笠原氏への忠節を誓う意味で旧主である長時の「時」の編緯をもらい受け盛時と名乗ったのだ。「武士は二君に仕えず」として、主君を武田から小笠原に戻したので名を変えたのだろう。

また、信府統記の松本諸寺院記の梅林山正眞院の項に、天正15年細萱内記が古厩因幡守盛晴の城跡に正眞院を建

立したとの記述がある(11)。この城跡とは小岩嶽城のことではなく古厩城のことだ。この古厩因幡守盛晴こそ、武田の軍門に降り晴信の「晴」の一字をもらい受けて「盛晴」と名乗った盛勝と考えられる。盛勝は盛晴と名を変えて武田氏に臣従していたのだ。そして小笠原貞慶の復帰によって名を旧に復して盛勝に戻したのだ。「武士は二君に仕えず」である。

古厩平三盛隆による起請文や、盛勝が盛晴と改名したことも、武田氏に忠勤を励んでいた証拠となる。小笠原氏から離反した仁科一族の有力者として貞慶から謀反を疑われ誅殺される原因ともなったと考えられる。

8　小笠原貞慶の松本復帰

武田氏滅亡後、甲斐・信濃の支配権をめぐって徳川氏と北条氏、上杉氏の三つ巴の争いが展開される中で、天正10年（1582）7月、旧臣を集めて松本に帰還した貞慶は、上杉方に支援されて深志城にいた叔父の小笠原洞雪斎を追って城に入り深志の名を松本に改め、安曇・筑摩両郡の支配を目指した。当初は徳川方の支援を受けていたが、徳川方が貞慶を軽視して、松本城を信濃支配の拠点にしようと部隊の駐留を目論んだことから、反発した貞慶は北条方に転じ、北からの上杉氏、南からの徳川氏の脅威に備えようとした。

同年8月、貞慶は塩尻峠の戦いにおいて父・長時を裏切った洗馬の三村氏、梓川の西牧氏を攻めて詰腹を切らせた。さらに反小笠原勢力である仁科一族の日岐丸山氏の日岐城を苦戦の末に落とした。しかし日岐丸山氏はなおも日岐大城に籠もって上杉氏の支援を受けて抗戦を続けた。この頃は上杉方が各地の土豪に対して調略の手を伸ばしていた形跡もあり、貞慶が疑心暗鬼に捕らわれていたのは疑いもない。逆に言えば小笠原氏から離反して武田氏に仕えていた赤沢氏や、海野氏、古厩氏も、日岐城攻めの小笠原方の軍勢に加わりながらも不安に駆られていたことであろう。

こうしたなかで、徳川と北条との和議が整い、甲斐と信濃は徳川の領分とされてしまう。北条氏の後ろ盾を失って徳川方からの圧力に抗しきれなくなった貞慶は天正11年2月嫡男の幸松丸を（後の秀政）を人質に差し出して徳川に臣従した。貞慶は徳川との交渉を進める傍ら領内の支配権確立を急いだ。それは父・長時を裏切った元家臣の粛正や反小笠原勢力の一掃でもあった。

9　古厩盛勝・盛時親子誅殺される

天正11年（1583）2月、貞慶は刈谷原城主の赤沢経康を上杉方の調略に応じて謀反を企てたとして切腹させ、さらに翌々日には古厩盛勝と塔原城主の海野三河守を松本城に呼び寄せて家臣ら20名余とともに誅殺した。貞慶が人をやって塔原を調べさせると兵糧は1俵も残されておらず悉く古厩小屋（註5）に運び込まれていたのでその全てを松本城に移し、古厩小屋は焼き払って謀反を未然に防いだと、その経緯を重臣の犬甘半左衛門に書き送っている(12)。前述したように、古厩盛勝は子盛時とともに小笠原氏から離反して武田氏に仕えていたことがあり、武田氏滅亡後松本に復帰した貞慶に臣従したが、上杉方への内通の疑いをかけられて誅殺されたのだ(13)。逃れた盛勝の子息・平三（＝盛隆＝盛時）も細野郷にて討ち取られている。

実際に謀反の企てがあったか否かを明らかにする術はないが、上杉氏による調略の手が伸びる状況の中、貞慶には父・長時時代の古厩氏の裏切りに対する快くない思いと猜疑心があったことは確かであろう。貞慶による領域支配強化の戦が仁科一族への復讐とみられるのはそのためだ。

10　父・兄の謀反でも生き延びた古厩盛親

ここでさらに大きな疑問が生じる。盛勝・盛時親子が謀反の疑いによって成敗されたにも関わらず、次男・三男とされる盛親・盛利がその後も小笠原氏に臣従しているのだ。盛親は先手足軽大将として貞慶から秀政・忠真の代に至るまで仕えている(14)。盛親は三代盛時の跡を継がず、子盛次が古厩氏四代目となり、五代盛常、六代盛清まで続く。親子・兄弟・親類にも累が及ぶであろう謀反の大罪にも関わらずに、である。何故処罰されなかったのかは大きな謎といえる。

考えられ得るのは、古厩一族は小笠原氏の復帰によって再度の分裂状態にあったであろうということ。一族の分裂と対立は小岩嶽城攻防戦の時にまで遡る深刻なものだったのかもしれない。それは、武田氏への恭順派の盛勝・盛時親子と小岩嶽氏及び小笠原氏に誼を通じる抗戦派の盛親・盛利兄弟との対立だったのではないか。武田氏滅亡後の小笠原氏の復帰によってその対立が再燃して、陰謀の密告という手段にまで及んだのではないか。大胆な推測であるが、盛親・盛利兄弟の母方の祖父は小岩嶽図書盛親だったと考えられないか。

古厩氏の嫡流による謀反事件にも関わらず盛親・盛利兄弟が処罰されず存続しているのは、そうとしか考えようがない。

11　古厩盛勝は二度の謀反事件で二度殺された？

注目すべき記録がある。小笠原氏の御当家末書「右馬助貞次君逆心御生害、一味之輩御誅罰之覚」(15)に天正12年（1584）貞慶の兄・貞次の謀反事件に連座して成敗された武士の中に古厩因幡の名がある。古厩因幡は盛勝と考えられるので、盛勝は天正11年（1583）2月と12年2月の2度誅殺されたことになる。しかも、盛勝と同じ時に松本城で誘殺された塔原三河（海野三河守）も、貞次の一味として誅殺されている。彼も二度殺害されたことになる。天正11年の事件は貞慶自らが犬飼半左衛門に宛てた書状(12)(13)に明記されており、天正12年の事件は御当家末書にある。これは何を意味するのだろう。

どちらかの事件が捏造されたと考えるしかない。とすれば貞慶にとって不都合な真実は兄殺しにあたる天正12年の貞次謀反事件である、こちらが捏造されたと考えるのが自然だ。貞次は還俗したとはいえ長時の正妻の子であり、側室の子である貞慶にとっては不安な存在であり、謀反事件を捏造して貞次を殺害することにより災いの種を未然に防いだと言うことであろう。そのために既に成敗したはずの古厩盛勝と塔原三河を、貞次を抹殺するために捏造した陰謀の加担者としたのだ。

こうして古厩氏三代目の盛勝は史料の上では二つの謀反事件に関与して二度誅殺された。事実としては天正11年の松本城での誘殺事件の一度だけではあるが、いずれも一族が根絶やしにされるような大事件だ。それにも関わらず系図上では次男とされる盛親が連座して罰せられることもなかったし、盛親の嫡男・盛次は古厩氏の四代目を継いでいるのだ。

これらの事実は、前述したように盛親は小岩嶽氏出身の母を持つ庶子で小岩嶽氏の血筋を引いていた可能性を強く示唆している。小岩嶽城で戦死した小岩嶽図書盛親の血筋の者が、天正11年に盛勝親子が誅殺されて断絶した古厩氏の名跡を継ぎ、小岩嶽の戦で戦死した盛親の名を襲名して古厩盛親と名乗って、戦禍で焼失した青原寺を再建、小岩嶽図書盛親を供養する位牌を祀ったのだ。

12　古厩氏進出以前から存在した小岩嶽氏

通説では小岩嶽氏または小岩氏は登場してこない。あたかも存在しなかったかのように見える小岩嶽氏を史料の中で探してみた。信府統記には小岩嶽氏の存在が4カ所に記載されている。

①小岩嶽圖書が安養山青原寺を建立した。 (3) (10)

②仁科正盛の子孫に小岩嶽兵部大輔がいる。 (16)

③嶽下村の城は仁科伊勢守正盛の子孫小岩嶽兵部大輔よりここに居住している。 (3)

④安曇郡は仁科氏の支配が六十代に及び在名を称する一族の中に小岩嶽氏と古厩氏がいる。 (17)

また、信府統記とは別に

⑤日岐大城主嫡流丸山氏系譜（丸山楽雲：信濃の古武士） (18) には、仁科盛忠（註6）の妹が小岩嶽但馬守に嫁いだとの記載がある。

以上見たように、①から④は1724年に完成した信府統記を出典としており、その根拠となった原史料が存在したのか、あるいは伝承に基づくものかは不明だが、小岩嶽氏の存在を強く窺わせる記述であり、とりわけ④は古厩氏とは別に小岩嶽氏が存在したことを明示している。また、②③⑤は、古厩氏がこの地に進出してくる以前から小岩嶽氏が存在したことを明示している。

小岩嶽の詰城と本城及び山麓の集落を取り込んだ宿城の規模の大きさは、短時日に築造できるものではなく、古厩氏が進出する以前、ほぼ一世紀以前からの営為の蓄積と考えるべきであろう。

古厩氏と小岩嶽氏との関係性について、「有明山麓古厩郷の話」 (19) によれば、「古厩氏が戦時の備えとして築いたのが小岩嶽城で、武将に古厩氏同族の小岩嶽氏を配して非常時に備えていた」としている。示唆に富む傾聴すべき推論と思われ、その根拠が知りたい。第４章で述べたように武田氏の侵攻に際して、古厩一族のうち、抗戦派の当主・古厩盛兼が入城して戦死した可能性はある。そして、武田支配という状況下において密かに古厩盛兼を供養するために古厩氏の名を隠して小岩嶽とし、没年も永禄4年にしたということは考えられる。いずれにせよ小岩嶽氏が存在したということは確かである。今後の検証を待ちたい。

13　終わりに

甲斐武田氏の侵攻に際して、周囲の土豪が殆ど武田方に靡くなか、孤軍奮闘だったのか、それとも援軍の見込みがあったのか、無謀とも思える籠城戦を戦った一族がいた。どのような理由と状況判断によって多数の犠牲者を出すに至るまで戦ったのか。そこにどんな物語があったのか知る由もない。

武田軍と戦って多数の犠牲者を出した小岩嶽城。そこで戦ったのは小岩嶽氏ではなく古厩氏だとする説が一般的だった。しかし、古厩氏が二度の滅亡の危機に見舞われながらもなぜ江戸時代まで生き残ることができたのかが疑問だった。もしかしたら戦ったのは古厩氏ではなかったのではないか。陰に隠された別の一族の存在があるのではないか。関係資料を渉猟するうちに、謎を解く鍵は古厩氏の系譜と青原寺の位牌にあると考えるに至った。

本稿では小岩嶽城で戦って滅亡した小岩嶽氏という小豪族が存在した事実を明らかにするとともに、その係累が古厩氏として復活したとの仮説を提起した。系図と位牌の謎解きに導かれながら、一方で系図の罠に取り籠められたような気がしないでもない。

戦国時代の守護大名の栄枯盛衰の流れの中で親族間の分裂と対立を強いられて数奇な運命を辿った仁科氏や古厩氏、そしてその陰に隠された小土豪・小岩嶽氏の悲哀と復活。それは強大な勢力の狭間で戦国乱世を逞しく生き抜いた安曇野の武士の歴史でもあった。本稿は、そうした安曇野の小土豪へのレクイエムでもある。

（以上　本文終わり）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

（註1） 通説は「イヌイの城」は犬甘城であり、天文19年7月に落城したとされている。ところが同年10月に、武田勢を、小笠原支援にやってきた村上勢と間違えて迎えに出た犬甘城主犬飼大炊之助が城を奪われるという事件 (20) が起きている。7月に落城して10月までに取り戻していたとするのは無理があり、この時までは犬飼氏が在城していたと考えるべきで、イヌイの城は犬甘城ではないことになる。

（註2） 小笠原長時の塩尻峠の戦いは仁科道外の戦場離

脱により敗北したとされている。しかし道外が何者であるかが必ずしも明らかでない。惣領家の盛明という説や、傍流の盛能という説もある。前掲の小倉藩渋田見氏系図によれば道外盛明と盛康は親子関係にあることから、親子で分裂していたことになる。道外は天文19年7月に出仕、盛康は22年1月に出仕している。逸見大悟氏は惣領家の盛康は仁科庄を、道外は仁科御厨をそれぞれ支配して分裂していたとし、天文20年村上義清が丹生子城め攻は武田方となった道外への攻撃としている。（逸見大悟：甲斐源氏、安曇郡へ！第３回資料）

（註3）「甲陽軍鑑」（1580年頃）には永禄4年６月（信濃町の）割ヶ嶽城を攻め落としたとの記事があるが、詳細の記述はない。「武田三代軍記」と「甲越信戦録」には信濃町の割ヶ嶽城（鰐ヶ嶽城）攻撃の模様が活写されており、その様子が「信府統記」の記述に酷似しており、登場人物の名も一致している。しかし、「甲越信戦録」の完成は江戸後期（1820年頃）、「武田三代軍記」も明治初期であり、いずれも「信府統記」（1724年）よりも後のことで、「信府統記」がこれらを参照したとは考えられない。逆に「信府統記」が参照された可能性はあるが、「武田三代軍記」「甲越信戦録」の原資料となった永禄4年６月の割ヶ嶽城攻めの史料を探索中。

（註４）青原寺の再建が武田氏統治下であったなら、位牌の銘を武田氏に憚って古厩氏の名を隠して小岩嶽氏とした可能性は考えられる。しかし武田氏統治下にあって古厩氏に寺院再建の余力は無かったと考えるべきであろう。逆に小笠原貞慶の復帰以後であるとするなら、古厩氏の名を隠す必要も無いわけで、いずれの場合も小岩嶽氏の存在が確かであることを示している。

（註5）この場合の古厩小屋とは小岩嶽城とされている。小岩嶽城が落城した後は武田氏に従った古厩氏が占有していたと考えられる。

（註6）仁科盛忠は仁科氏の祖・盛遠を供養するために応永11年（1404）に大町の霊松寺を創建している。その妹が小岩嶽氏に嫁しているのだから、小岩嶽氏は古厩氏よりも百年以上前に当地に土着していたことになる。

――――――――――――――――――――

(1) 妙法寺記　｛信濃史料叢書（下）657p｝
(2) 渋田見舎人盛方系系図｛安曇氏と仁科氏門葉衆58ｐ丸山楽雲｝
(3) 信府統記18巻　松本城古城目録　松川組嶽下村｛新編信濃史料叢書第6巻384p｝
(4) 甲陽軍鑑　品第17第８巻　｛甲斐志料集成　133～149p｝
(5) 甲越信戦録之六　甲州勢割ヶ嶽を攻る事　59ｐ　武田三代軍記　262ｐ
(6) 箋註高白齊記　甲斐郷土史研究会　山梨デジタルアーカイブ
(7) 信府統記21巻　松本諸寺院記　醫王山松尾寺｛新編信濃史料叢書第6巻449p｝
(8) 穂高町誌　230p 鶴王山松尾寺
(9) 穂高町誌　241～242p 安養山青原寺
(10) 信府統記22巻　松本諸寺院記　安養山青原寺｛新編信濃史料叢書第6巻449p｝
(11) 信府統記22巻　松本諸寺院記　梅林山正真院｛新編信濃史料叢書第6巻457p｝
(12) 犬甘半左衛門宛小笠原貞慶書状案（御書集「笠系大成付録」）
(13) 犬飼氏宛小笠原貞慶書状　御書集「笠系大成付録」｛信濃資料（15）568～574ｐ｝
(14) 諸役人之次第（貞慶・秀政）笠系大成抄｛信濃史料叢書（下）724p｝
(15) 福岡県史近世史料編・御当家末書下45～46p
(16) 信府統記17巻　安曇筑摩両郡舊俗伝｛新編信濃史料叢書第6巻362p｝
(17) 信府統記18巻　松本領古城地｛新編信濃史料叢書第6巻369p｝
(18) 日岐大城主嫡流丸山氏系譜（丸山楽雲：信濃の古武士）356p
(19) 有明山麓古厩の郷の話　ふるさとの歴史や文化をたずねる会　20p
(20) 「二木家記」笠系大成抄　｛信濃史料叢書（下）701ｐ｝

＜参考書籍＞
・「小笠原右近大夫貞慶」志村平治著　総合出版社暦研
「信濃小笠原氏」　花岡康隆著　戎光祥出版
・「武田信玄の戦略」　柴辻俊六著　中公新書

編集後記

加藏友美

当会の創立から十五年目となる本年四月、編集委員長を拝命しました。初めての事に慌しく過ごしながらも、多くの方々の支えのおかげで、無事に会報を発行することが出来ました。心から御礼申し上げます。

会やサロンを通じて出会った方々との御縁に感謝する時、一期一会という言葉が思い浮かぶと同時にもう一つの考えが浮かびます。自分の親の、おじいちゃんとおばあちゃんの……と十代遡ると千人、二十代遡ると百万人を超えます。小岩嶽城に逃げ込んだ村人も、北村遺跡で眠っていた人骨も、考え方によってはみんな自分と繋がっているのではないかと不思議な感覚にもなるのです。

教科書でしか知らなかった遺跡や遺物を身近に引き寄せて考えられることが、足元の歴史を学ぶ面白さだと感じています。足元を見つめてフッと顔を上げた時、眺める景色がそれまでと違って見えるような、幸せな心地がするのです。

近くだからちょっと足を運んでみようかな、と思うきっかけとなるような紙面を作っていければと考えています。今後も良い会報が発行出来ますよう、原稿執筆に何卒ご協力お願い申し上げます。